

アセビの苗木生産におけるエセフォンの摘らい効果

坂井康弘・*松川時晴・**吉田徹生
(福岡県八女東部農業改良普及所・*福岡県農業総合試験場・**福岡県農業技術課)

SAKAI, Y., T.MATSUKAWA and T.YOSHIDA: Effects of Ethephone Treatment on Disbudding of *Pienis japonica*

福岡県八女東部地域では、近年、公共緑化木としてのアセビの苗木生産が拡大している。しかし、アセビは、開花・結実すると春枝の伸長が著しく抑制され、苗木育成能率(生長率)の遅滞および樹形が乱れる原因となる。このため、開花期前後に手取りで摘花(果)を行っているが、多くの労力を要し、労働配分の事情から実行には困難な面がある。そこで、エセフォンによる摘らいを検討し、成果を得たので報告する。

1. 試験方法

福岡県星野村の現地圃場において、自生種より選抜した1系統の3年生苗木を用い、試験区は、1区5株の2反復とした。殆んどの枝で発らいが完了した1979年10月16日にエセフォン(エスレル10)水溶液を花穂を中心に1株当たり約10ml散布した。摘らい効果は、11月20日につばみの残存度を0~4の5段階に分け観察・判定した。次年度のほう芽は春枝の伸長がほぼ終了した1980年5月23日に調査した。

2. 結果

摘らい効果: エセフォン散布処理区では、いずれも摘らい効果が認められた。150ppm~500ppmの範囲では高濃度ほどその効果が高く、500ppm区では75%以上のつばみが落らした。つばみは、花梗と花軸の付け根部分から落らした。花軸は翌年まで枝の頂部に残った。

落葉など茎葉への薬害は、いずれの処理区でも認められなかった。

次年度のほう芽におよぼす影響: エセフォン処理によっても花穂に残ったつばみは、各区ともほとんどのものが正常に開花した。着らい枝での新しょうの発生は、無処理区では、35%であったが、処理区は、いずれも高いほう芽割合を示し、3区と4区では殆んど着らい枝から新しょうが発生した。着らい枝から発生した新しょうの総長も処理区で大きな値を示した。しかし、新しょうが発生した着らい枝・1枝当たりの新しょう発生本数および平均長は、処理区間の差異が殆んど認められず、着らい枝のうちのほう芽割合が、最終的な生長率に大きな影響をおよぼした。着らい枝の生長率は、無処理区の141%に比べ、3区では、その2.6倍、4区では3.9倍と大差を生じた。また、新しょう発生形態は、無処理区では、いわゆる「片伸び」の傾向を示したのに対し、3区と4区では全ての着らい枝から新しょうが発生し、樹形が良好となった。

以上から、アセビの苗木生産では、秋季にエセフォン300~500ppmの処理により、落らいを化学的に誘発し、翌春の新しょう発生を促進することは、苗木育成能率の向上に有効な手段と考える。

第1表 エセフォン処理による摘らい効果ならびに次年度のほう芽への影響

	処 理 前	処 理 後													
		1979. 10. 16						11. 20	1980. 5. 23						
		① 着らい枝数 (本)	② 着らい枝総長 (cm)	③ 着らい枝平均長 (cm)	④ 無着らい枝数	⑤ 無着らい枝総長 (cm)	⑥ 無着らい枝平均長 (cm)	⑦ つばみの残存度	⑧ 着らい枝のうち ほう芽数 (本)	⑨ 未枝のうち ほう芽数 (本)	⑩ ほう芽割合 (%)	⑪ 新しょう本数 (本)	⑫ 新しょう総長 (cm)	⑬ 新しょう平均長 (cm)	⑭ 新しょう芽当たり 本数 (本)
1 無処理	62	361.4	5.8	106	364.2	3.4	3.8	22	40	35	88	511.0	5.8	4.0	141
2 150ppm	54	287.8	5.3	74	189.6	2.6	2.7	34	20	63	92	589.2	6.4	2.7	205
3 300ppm	45	256.5	5.7	84	223.0	2.7	1.7	45	0	100	155	952.5	6.1	3.4	371
4 500ppm	62	250.6	4.0	90	280.0	3.1	0.9	56	6	90	218	1,365.0	6.2	3.9	545

注) つばみの残存度は、0=全て落らい、1、2=半数落らい、3、4=落らいなしの5段階とした。